



NEWS LETTER

ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表 岡室 美奈子

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2009年度に文部科学省より共同利用・共同研究拠点として認定されました。2014年度には再認定を受け、現在第2期の研究活動を推進しています。

前号でお知らせしたとおり、第2期においては、アジアで唯一の演劇専門博物館が母体であるという利点を活かし、演劇博物館に収蔵されながらいまだ十分に学術的に活用されていない貴重な未発表資料群を研究資源として提供するという方針を打ち出しました。この方針に沿って、未発表資料群のリストをホームページ上で公開して研究課題を公募し、学外の専門家を中心とする研究計画委員会において厳正な審査により4件を採択し、テーマ研究1件と併せて、5チームが研究活動を行ってきました。各研究チームの研究期間は原則として2年間となっているため、2015年度で一応の完結となります。どのチームも密度の濃い充実した活動を行ってくださったおかげで、資料の整理・考証・研究が大幅に進展しました。以下、2015年度の活動とその成果を簡単にご紹介します。詳細は本ニューズレターの各研究チーム報告ページをご覧ください。

テーマ研究として設定した「寺山修司の創作～一次資料から明らかにする活動実態～」では、寺山が初期に手掛けたラジオやテレビを中心とする台本類のデジタル化を完了しました。初期ラジオ・テレビ作品は放送局にも録音や録画が残存していないものが多く、演劇や映画、短歌等に比して遅れている寺山のメディア作品をめぐる研究にとって貴重な資料となるでしょう。公募研究の成果については以下のとおりです。「坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究」では、逍遙宛書簡の考証・翻刻作業を進めるとともに、士行関連の約1,000点の写真のデジタル化作業を完了したほか、書簡の仮目録を作成



公募研究2 公開研究会（2015年9月5日、小野記念講堂）

しました。「無声映画の上演形態、特に伴奏音楽に関する資料研究」では、譜面の考証を大きく進展させるとともに、弁士や演奏家を招いて2度の上映会（『軍神橋中佐』、『忠臣蔵』）を行い、成果を一般に還元しました。「幻燈資料の整理・公開に関する研究」では、演劇博物館春季企画展として「幻燈展——プロジェクション・メディアの考古学」を開催したほか、成果として『幻燈スライドの博物誌：プロジェクション・メディアの考古学』（青弓社）を刊行しました。「千田是也資料に関する調査・研究」では、アルバム2冊に収められた貴重な写真のデジタル化を完了したほか、「アーニー・パイル劇場関連資料」や手紙・葉書等のデジタル化を行いました。地道かつ緻密な作業により資料の詳細なリストを作成しつつ、大きな成果を生み出してくださいました各研究チームに、この場を借りて御礼申し上げます。これらの成果は、今後、当該分野の研究の発展に大きく寄与することと思います。

2016年度は、「坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究」をテーマ研究に設定し、新たな公募研究チームとともに、研究を推進していきます。今後も豊富な研究資源と研究環境の共有化を図り、国内外の演劇映像研究を牽引して学術研究の推進に貢献するとともに、研究成果を広く社会に還元することを目指していきたいと考えています。みなさまのご支援とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

contents

■拠点代表あいさつ	1 p
■平成 27 (2015) 年度 テーマ研究成果報告	2 p
■平成 27 (2015) 年度 公募研究成果報告	3 p
■Mission and Vision	7 p
■Report on principal research findings, fiscal 2015	8 p
■Report on selected research findings, fiscal 2015	9 p

February 2016
Number. 6

テーマ研究

1

寺山修司の創作～一次資料から明らかにする活動実態～

研究代表者：塚原史（早稲田大学法学学術院教授）

研究分担者：岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授）、梅山いつき（早稲田大学演劇博物館助教）

【研究目的】

本研究は寺山修司の創作について、演劇博物館が所蔵している関連資料と寺山の秘書を長年務めておられた田中未知氏が所蔵する資料をもとに明らかにすることを目的としている。昨年は、田中氏が所蔵する資料の調査を行ったため、本年は演劇博物館所蔵の資料を調査対象とした。放送作家時代（1960年代）の作品は多くが出版されていない。現在、寺山研究において劇団旗揚げ以前のこの時代が注目されているため、今後の寺山研究を発展させるためにも、本年は当館が所蔵する台本のデジタル化を進めた。

【研究成果の概要】

ラジオとテレビ台本の撮影を優先したが、演劇やその他の台本も予算内で撮影することができた。以下にその一部の作品名をあげる。以下の多くは寺山の作品年表に含まれていない。昨年までの調査で進めていた新聞記事の整理をもとに、放送日を確定し、内容の交渉作業に取り組みたい。同時に、台本の利活用の方法についても日本脚本アーカイヴズ推進コンソーシアムや国会図書館等関連機関の協力を得ながら検討し、最適な方法で公開できるようつとめたい。

<ラジオ台本> ＊一部

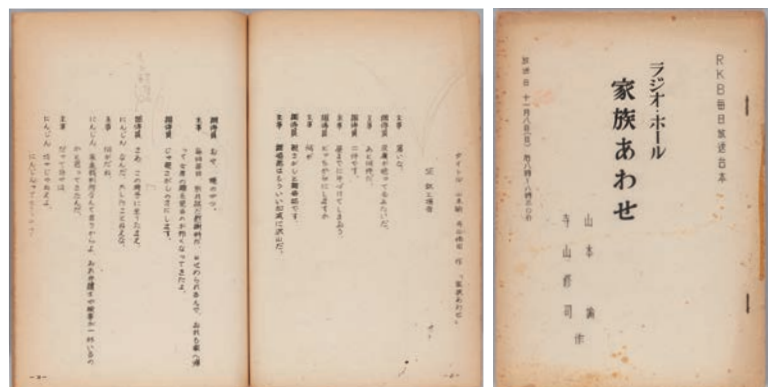
- ・ラジオ・ホール「家族あわせ」（共同脚本・山本諭）
- ・海外ラジオドラマ特集第4夜 1963年度
イタリア賞受賞作品「調べ室の少年たち」
- ・昭和37年度芸術祭放送部門参加作品
ラジオのためのファルス「卵物語」 <第一稿>
- ・〔立体音楽堂〕 ミュージカル「湖水の鐘」（第一稿）（鈴木三重吉童話集による）
- ・イタリア賞参加候補 ステレオによる叙事詩「黙示録」（セリフ収録用台本）
- ・ジャズと詩によるラジオのための実験「蹴球学」 Foot balllogy
- ・昭和42年度芸術祭ラジオ部門参加作品

ラジオのための叙事詩「九州鈴慕」

- ・第15回芸術放送部門参加作品 ラジオによる叙事詩の試み「血の夏」
- ・POETICAL DRAMA FOR CHILD「星に全部話した」
- ・東京ガスラジオ劇場 BIRTH OF JAPANESE
DRAMATIC DOCUMENT「もう呼ぶな、海よ」

<テレビ台本> ＊一部

- ・23回 芸術祭参加作品 東芝日曜劇場「子守唄由来」
- ・夢のドキュメンタリーー心のシリーズー「飛びたい
LET MAKE EVERYONE FLY」
- ・日立ファミリーステージ 大江健三郎原作 「孤独な
青年の休暇」（改訂版）
- ・第19回芸術祭参加作品 「海へ行きたい」
- ・テレビドラマ 女の園 「影の店」
- ・短い短い物語 第31回「かわいそうなお父さん お
父さんを殺したのは あの殺し屋ではなくて一羽の鳥
のうたう唄だ」（決定稿）
- ・カネボウ木田プレゼント実験劇場 「隣人の条件また
は首物語」（準備稿）
- ・短い短い物語 第58回 テレビリリック「首」（決
定稿）
- ・愛の劇場「宿題」（第一稿）
- ・毎日放送15周年記念番組 怒涛日本史 第6回「楠
木正成」



『家族あわせ』（1961年放送）
Kazoku Awase (Family Together), broadcast in 1961

公募研究は審査を経た研究計画に基づく複数の共同研究プロジェクトにより構成され、演劇博物館の収集品の有効利用を目指すものです。プロジェクトに対し、本拠点は共同研究の場と資料を提供します。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は本ニューズレター編集時のものであり、現在のものとは異なる場合があります。

公募研究

1

坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究

研究代表者：濱口久仁子（立教大学異文化コミュニケーション学部兼任講師）

研究分担者：菊池明（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、松山薫（早稲田大学図書館専任職員）、小島智章（武蔵野美術大学非常勤講師）、水田佳穂（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、柳澤和子（早稲田大学教育総合科学術院非常勤講師）

【研究目的】

演劇博物館に収蔵される坪内逍遙・士行関係資料には未整理のものが多く残されている。自筆原稿や逍遙宛書簡など膨大な量に及ぶ逍遙資料については、依然個別の調査が及んでおらず、資料番号登録がなされていないものも少なくない。また士行資料については、十数年前に寄贈された当時のまま保管されており、内容の確認、整理作業に着手できていないのが現状である。本研究では、これらの資料の全体像を把握したうえで、研究期間内に実行可能な範囲で優先順位をつけながら調査を行い、今後の研究に資する詳細な目録を作成することを計画している。

【研究成果の概要】

○坪内逍遙資料（坪内逍遙宛書簡）

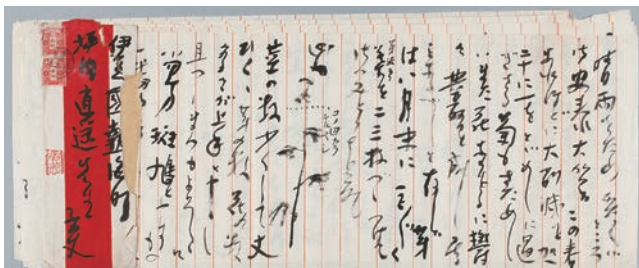
今年度も未整理書簡の整理及び仮目録作成作業を進め、外国人を除く約400名分の逍遙宛書簡の仮目録を作成し、そのうち232名765通のデジタル撮影を行った。また書簡の翻刻は、逍遙宛會津八一書簡128通の年代考証と翻刻を完了した。逍遙と八一の往復書簡は既に「坪内逍遙 會津八一往復書簡」（1968）として刊行されているが、今回の翻刻はすべて新出書簡である。

八一の書簡は長文が多く、逍遙に率直に真情を吐露しており、今まで不明であった部分を補うことができる貴重な資料である。逍遙・八一の和歌や俳句も記載され、美しい絵入りのはがきも多く含まれている。今年度は前半80通を「演劇研究」39号に掲載（菊池・松山・柳澤・濱口「〈坪内逍遙宛諸家書簡1〉坪内逍遙宛會津八一書簡（1）」）する。（後半は次年度の予定）

○坪内士行資料

20箱のうち5箱を開封し、3箱分を整理した。写真約1千点と、書簡約1千8百通がこれに当たる。ともに仮目録を作成し、写真はデジタル化を済ませた。

これまで資料的限界から顧みられることの少なかった、戯曲研究会、芸術協会、小林一三に託されて責任者を務めた宝塚国民座といった、大正昭和初期の士行の新劇活動が明らかになった。関西在住の早稲田の卒業生をはじめ、彼を守り立てようとする周囲の様子も窺うことができる。宝塚新劇団（大正8年に一三が企てた男子養成）などは、いわば士行にとって「まぼろしの宝塚文芸協会」であったという位置づけもできる。これについては平成27年度歌舞伎学会秋季大会二日目（12月13日於学士会館）にて研究発表（水田「坪内士行と宝塚男子選科」）を行った。



1925.8.25



1923.10.22



1925.8.5



1925.8.23



1925.8.31



坪内逍遙宛會津八一書簡 Letters from Aizu Yaichi to Tsubouchi Shoyo



宝塚国民座、大阪第一回公演、大正15年11月27日、於朝日会館、「大いに笑ふ淀君」

Takarazuka Popular Theater [Takarazuka Kokumin-za], first performance in Osaka, November 27, 1926, at Asahi Hall, Ōi ni Warau Yodogimi (Laughing Yodogimi in hysteric)

無声映画の上演形態、特に伴奏音楽に関する資料研究

研究代表者：長木誠司（東京大学大学院総合文化研究科教授）

研究分担者：白井史人（東京医科歯科大学教養部非常勤講師）、紙屋牧子（東京国立近代美術館フィルムセンター客員研究員）、柴田康太郎（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）、山上揚平（東京藝術大学音楽学部非常勤講師）

【研究目的】

本研究は、演劇博物館所蔵の無声映画の伴奏譜を対象とする。本資料は1920年代の半ばから1930年代初頭にかけて作成された楽譜資料である。日活直営の品川娯楽館を中心とした映画館所蔵の楽譜と、1920年代に娯楽館などの日活直営館で活動していた楽士・平野行一（1898～没年不詳）という人物が所蔵・使用していた資料が大部分であることが分かった（2014年度調査結果）。この「ヒラノ・コレクション」を主たる調査対象とし、大正から昭和初期にかけての映画の伴奏音楽の実践を、特に楽譜資料の分析を通じて明らかにすることが本研究の目的である。

【研究成果の概要】

- ① 楽譜資料の時代考証・内容分析…コレクション内の楽譜は少なくとも1924年頃からトーキー初期の1933年頃にかけて収集・使用されたことが分かった。まとまって所蔵されていた国内出版曲集『Small Orchestra』などのうち、使用頻度が低く未整理のままであったパート譜の目録化と照合を進めた（400点程度）。その結果、映画館の規模に合わせた楽器編成の取捨選択、手書きによる楽譜（特に三味線など）の追加や、パート譜の体系的な収集・管理が行われていたことが明らかとなった。
- ② 同時代の文献調査・他の楽譜資料との関連…『東京演芸通信』などの同時代の文献資料の収集・調査を

進め、同時代の楽士の活動や映画館興行のなかでの伴奏音楽・奏楽の機能を検討した。また、佐々紅華遺稿（埼玉県寄居町）、松平信博遺稿（愛知県豊田市・松平郷）内の楽譜をコレクションの楽譜と比較検討し、日活の依頼のもと彼らが作曲した邦画用伴奏曲が各直営館へ浸透していく過程が示唆された。

- ③ 作品別の楽譜資料の検討と参考上映…本コレクション内に保存されていた特定の作品のために作成された楽譜は、以下に大別される。

- ・楽士の手稿による選曲譜「ヒラノ選曲譜」【図1】（31作品＋無題断片）
- ・製作会社が簡易印刷し発行した「日活配給選曲譜」【図2】（12作品＋断片）

このうち『軍神橘中佐』日活配給選曲譜（計8曲、アメリカ発行曲集からの転用や軍歌を含む）と、『忠臣蔵』ヒラノ選曲譜（計9曲、邦楽古典曲と松平信博作曲による楽曲1曲）を用いて参考上映を行った。楽曲の出典調査などを行い、演奏家の協力のもと楽器編成・楽曲の反復回数・場面との組み合わせを選択した。製作当時の楽譜を用いた再現の試みとして一定の成果が上がったが、楽譜の使用法や弁士の説明との関連や、通作された欧米の伴奏譜の活用との相違などの課題も明らかとなった。更なる活用法を検討したい。

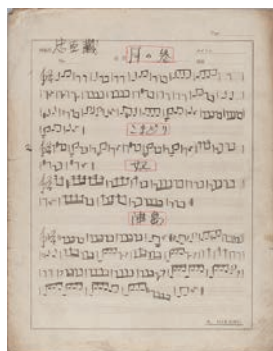


図1 「ヒラノ選曲譜」『忠臣蔵』（池田富保監督、日活配給選曲譜、1926年、K. HIRANO）署名入り五線紙使用、手稿）

Figure 1 Compiled Score Handwritten by Hirano for *Chushingura* (1926, directed by Tomiyasu Ikeda; music papers bearing the printed signature of K. Hirano)

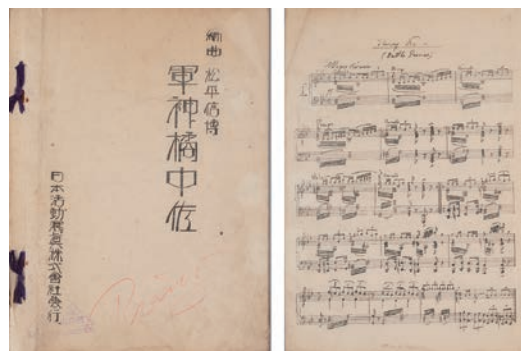


図2 「日活配給選曲譜」『軍神橘中佐』（三枝源次郎監督、ヒラノ選曲譜、1926年、編曲：松平信博、所蔵印：神奈川演芸館、簡易印刷） 左：表紙、右：ピアノ譜

Figure 2 Compiled Score Distributed by Nikkatsu for *Lieutenant Colonel Tachibana, the War God* [gunshin tachibana chūsa] (1926, directed by Genjiro Saegusa, compiled by Nobuhiro Matsudaira; ownership mark: Kanagawa Engeikan; simple print form; left: binding; right: piano part)

公募研究 3

プロジェクション・メディアの考古学：幻燈資料の整理・公開とデジタルデータを活用した展示・創作

研究代表者：大久保遼（東京藝術大学社会連携センター特任助手）

研究分担者：草原真知子（早稲田大学文学学術院教授）、向後恵里子（明星大学人文学部准教授）、上田学（日本学術振興会特別研究員）、遠藤みゆき（東京都写真美術館学芸員）

【研究目的】

演劇博物館には、世界的に見てもきわめて貴重な映画前史の映像文化に関する資料が数多く収蔵されている。今回の共同研究では、演劇博物館に所蔵されている幻燈スライドのコレクションの体系的な整理を行い、今まで明らかにされてこなかった所蔵スライドの年代や題材の特定を進める。またこうした調査に加え、その成果を展示や図録、データベースなどによって公開・共有し、その価値や新しい表現の可能性を探ることを目指す。

【研究成果の概要】

2015年4月から8月に開催された「幻燈展：プロジェクション・メディアの考古学」および、『幻燈スライドの博物誌：プロジェクション・メディアの考古学』（青弓社、2015年）の刊行を通じて、(1) 幻燈の販売目録とスライドの対照の必要性、(2) 幻燈と同時代の他の視覚文化との連関の解明、以上の2点が今後の課題であることが明らかになった。

(1) については、演劇博物館に所蔵されている販売目録と、館蔵のスライドに関連する草原真知子氏所蔵の

販売目録のデジタル化を進めた。また館蔵資料のうち海外のスライドに関しては、Magic Lanternの代表的なデータベースであるLUCERNAの情報との比較を行った。これにより、例えば「画家と楽士」「写真家と子供」と記録されていた館蔵スライドはともにイギリスのTheobald & CO.により1905年に制作されたものであることが判明した。販売目録やデータベースとの対照により新たに明らかになった情報は、随時演劇博物館の幻燈データベースに追加登録する予定である。

(2) については、まず11月20日に遠藤みゆき氏による報告「中島待乳の幻燈制作」が行われ、写真家でもあった待乳の幻燈制作や、画学生だった園がスライドの下絵を描いていたことが明らかにされ、幻燈と写真や版画、油絵といった視覚文化との連関が指摘された。また1月12日にはエルキ・フータモ氏による報告「スクリーン・プラクティス：メディア考古学的視点から」が行われ、幻燈が映像だけでなく音楽やパフォーマンスを伴っていたこと、その観点からすると、同時代のムービング・パノラマにおける口上や「Bänkelsang」と呼ばれるブロードサイド・バラッドの絵解きなどの大衆文化と関連しているとの指摘がなされた。



中島待乳の幻燈スライド（演劇博物館所蔵）
Lantern Slide by Matsuchi Nakajima



ブロードサイド・バラッドの絵解き
Bänkelsang

千田是也と同時代演劇—千田資料に関する調査・研究

研究代表者：阿部由香子（共立女子大学文芸学部教授）

研究分担者：宮本啓子（白百合女子大学文学部非常勤講師）、寺田詩麻（聖学院大学人文学部非常勤講師）、秋葉裕一（早稲田大学創造理工学部教授）

【研究目的】

千田是也コレクションは、2001年4月に千田是也の長女中川モモコ氏により寄贈された遺品、旧蔵書、演劇資料でありダンボール300箱以上（受入時）にもおよぶ膨大な資料である。それらは大まかな分類と整理が進み、特に図書資料とアルバム、スクラップブック、カードなどの資料は2005年より閲覧可能な状態にあるが、現段階では未だ資料の仮整理に過ぎず、内容についての検討は進められていない。本研究においては千田コレクションの中から「J：伊藤道郎関係」資料をとりあげ、整理、保存、デジタル化を進めながら、多様な演劇資料を研究の基礎資料とするための方法や問題点を探ることとする。同時に「J：伊藤道郎関係」資料の考証を進めながら1945年～1950年前後のアーニー・パイル劇場に関する情報を整理し考察していくこととする。

【研究成果の概要】

(1) 資料の確認とデジタル撮影

伊藤道郎関連のJ資料J1～J31のうち今回は以下の内容を確認した。

J1、J2、J3、J4、J5、(H31)：写真アルバム／J11-8：1945～50年のスクラップブック／J23：アーニー・パイル劇場関係資料／J24：オリンピック関係資料／J27：戦中資料、南洋パルプ資料／J28：書簡

資料の種類としては、写真、プログラム・チラシ、台本、雑誌や新聞のコピーや切り抜き、直筆メモ、原稿、

書簡などがある。そのうち写真アルバム27冊（写真約960点）と書簡、アーニー・パイル関連資料のデジタル撮影を進めた。同時に写真のキャプションや裏書きなどを確認し、資料情報の入力作業も行った。

写真資料は1920年代～50年代にかけてヨーロッパ、アメリカ、日本と各地で活躍した道郎の足跡を詳細に知るための貴重な手がかりとなる。今後、撮影者、現像所などの考証も進める必要がある。J28の書簡は1941～1943年時に監禁されていたキャンプリビングストーンから妻の艶子夫人に宛てたもの（約53点）や、戦後ロサンゼルス日本人町再建計画にかかわるものなどが含まれている。J23のアーニー・パイル劇場関係は1946～1954年の劇場内資料、道郎の舞台創作の過程の資料などが含まれている。いずれもデジタル撮影することで原資料の劣化を防ぎ、多様な形態の資料を有機的に検証することが可能になった。

(2) アーニー・パイル劇場関係資料の意義

1943年12月に日本に帰国した道郎が終戦後、アーニー・パイル劇場の芸術顧問・演出・振付の仕事を担当したのは、英語に堪能でアメリカ文化にも通じており、日本人のスタッフや芸能関係者を掌握する手腕もあったからである。日米双方から重宝がられていた当時の状況が資料からも判明する。また、実際に舞台作品を創り上げる際のメモ、スケッチ、台本からはレビューやショーの構成や工夫を、舞台写真やプログラムからは上演の様相をうかがい知ることができる。特殊な時代と空間に道郎という特別な存在がいたことで生み出された舞台作品群であったといえよう。



『ジャングルドラム』
舞台写真
Photograph of
Jungle Drum



『ラプソディーインブルー』
舞台写真
Photograph of
Rhapsody in Blue



『タバスコ』メモ
Draft of Tabasco



『タバスコ』原稿
Note of Tabasco



Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Minako Okamuro

In 2009, the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, which is run by the Waseda University Tsubouchi Memorial Theatre Museum, was certified as a Joint Usage / Research Center by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology. The Center was recertified as such in 2014, and is currently advancing the second phase of its research activities.

As mentioned in the previous issue, the Center formulated a policy for phase 2 as follows. Taking advantage of the fact that the Tsubouchi Memorial Theatre Museum is the only one of its kind in Asia, we decided to provide precious and as-yet-unpublished materials for research that are held by the museum but have not been sufficiently utilized academically. In line with this policy, these materials were publicized on the website, and an appeal for research tasks was issued. The candidate research tasks were carefully screened by the Research Planning Committee, which chiefly comprises experts from outside Waseda University. Consequently, four tasks were selected, and together with a research task proposed by the Museum, five task teams have been working on their respective research. The Committee determined that the term of research should be two years in principle; the teams were expected to carry the work to a certain state of completion by the end of 2015. With the thoroughgoing and meticulous research carried out by each team, considerable progress was made in terms of the material arrangement and documentation. For additional details, please see each team's report page in this newsletter.

Regarding the research theme "The creative works of Shuji Terayama—the actual circumstances of his activities, as clarified by primary materials," the assigned team has completed the digitization of the scripts that Terayama worked on early in his career, particularly those used in radio and television plays. For many of these early radio and television works, audio or visual recordings of the work do not remain in broadcasting stations. Thus, the museum material will serve as a precious resource for the research of Terayama's media works, which lags behind the research into his theatrical work, movies, and *tanka* poetry.

The outcomes of the other research tasks are as follows: In "Basic research survey of materials relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi," the team advanced documenting and reprinting Shoyo's letters, finished digitizing approximately 1,000 photographs related to Shiko, and created a provisional catalogue of the letters. In "Research on materials related to the presentation of silent films, and particularly their musical accompaniment," the team considerably advanced in documenting the musical scores. They also invited a narrator and orchestra to take part in two film screenings of "Lieutenant Colonel Tachibana, the War God" (*gunshin tachibana chūsa*). Thus, they contributed to society with their research findings. In "The arrangement and publication of magic lantern slides," the team held the museum's spring-term project exhibition "Magic Lantern Exhibition: The Archeology of Projection Media (*gentō: purojekushon media no kōkogaku*)," and published their research findings in "The History of Magic Lantern Slides: The Archeology of Projection Media (*gentō suraido no hakubutsushi: purojekushon media no kōkogaku*)" (Seikyusha, 2015). In "The investigation and research into the Senda materials," the team completed the digitization of precious photographs stored in two albums, and carried out the digitization of materials related to Ernie Pyle Theatre, letters, and postcards.

We would like to take this opportunity to thank each team for their diligent and painstaking efforts, which have resulted in highly detailed lists for the materials and yielded significant research findings. We believe that the research findings will contribute greatly to the development of research in these particular fields.

This year, we will recruit new research teams to make farther research inroads. Looking forward, we would make our abundant research resources and research environment available for joint research. We will also help drive forward academic research by being at the forefront of theater and film arts research both at home and abroad, and we will return the research findings to society at large. We would like to thank everyone for the generous support.

○ Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Institute, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members listed below were accurate at the time this newsletter was edited, but may have changed subsequently.

Principal research

1

The creative works of Shuji Terayama — the actual circumstances of his activities, as clarified by primary materials

Principal Researcher: Fumi Tsukahara (Professor, Faculty of Law, Waseda University)

Collaborative Researchers: Minako Okamuro (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University), Itsuki Umeyama (Assistant Professor, Waseda University Theatre Museum)

Research objective

This research aims to investigate the creative works of Shuji Terayama, specifically the materials in the collection of the Theatre Museum, and those provided by Michi Tanaka, who worked as Terayama's secretary for many years.

As we have completed a survey of the materials held by Tanaka last year, we plan to scrutinize the collection of the Tsubouchi Memorial Theatre Museum this year. Many of his works from his period as a TV and radio screenwriter (1960s) remain unpublished. The present focus of research on Terayama is gathered in this period, which came before he founded his theater company. Therefore, with a view to the future development of research on Terayama, we worked on the digitization of the scripts held in the museum.

Summary of the research findings

We prioritized digitally photographing the scripts for radio and television plays, but we also photographed scripts for theater and other productions, with consideration for the limit of our budget. A number of the titles of these works are listed below. Many of the listed works are not included in the chronology of Terayama's works. We will work on identifying the broadcast dates by referring to relevant newspaper articles, which we catalogued last year. We will then hopefully move to a content negotiation session. Meanwhile, by working in collaboration with the National Script Archives Consortium, the National Diet Library, and other relevant institutions, we will also examine the ways of utilizing the scripts, and endeavor to publicize the optimum methods.

A portion of the available radio scripts

- *Kazoku Awase* (Family Together), Radio Hall, (Script/Screenplay Assistance, Satoshi Yamamoto)
- *Shirabe Shitsu no Shōnentachi* (Boys in the interrogation room), Overseas Radio Drama Collection, 4th Night, 1963 Prix Italia winner
- *Tamago Monogatari* (Egg Story), a farce for radio (first manuscript), 1962 Participant in the National Arts Festival Broadcast Section
- *Kosui no Kane* (Lake Bell), musical, Stereophonic Music Hall;

first manuscript from Miekichi Suzuki's collection of old fairytales

- *Mokushiroku* (Apocalypse), epic poetry in stereo, script for recording lines, Prix Italia candidate
- *Shūkyū-gaku* (Study of Football), Experiment in jazz and poetry-based radio
- *Kyūshū Reibo*, epic poetry for radio, 1967 National Participant in Arts Festival Radio Section
- *Chi no Natsu* (Summer of Blood), epic poetry for radio, 15th National Arts Festival Broadcast Section entry work
- *Hoshi ni Zenbu Hanashita* (Told Everything to the Stars), poetic drama for children
- *Mō Yobuna, Umi yo* (Oh Sea, Don't call me anymore), birth of Japanese dramatic document, Tokyo Gas Radio Theater

A portion of the available television scripts

- *Komori-uta Yurai* (Origin of Lullabies), 23rd National Arts Festival participant, Toshiba Sunday Theater participant
- *Tobitai* (Let's Make Everyone Fly), Dream Documentary: Mind Series
- *Kodoku na Seinen no Kyūka* (The Lonely Youth's Holiday), Hitachi Family Stage: Kenzaburo Oe
- *Umi e Ikitai* (I Want to Go to the Sea), 19th National Arts Festival participant
- *Kage no Mise* (Shadow Shop), Television Drama Onna no Sono
- *Kawaisō na Otō-san Otō-san o Koroshitanowa Ano Koroshiya dewa nakute Ichiwa no Tori no Utau Uta da* (Poor Father, Father was Killed not by a Murderer but by a Song Sung by a Bird) (final manuscript), Short Short Stories, 31st episode
- *Rinjin no Jōken mata wa Kubi Monogatari* (Neighbor's Conditions or the Story of Heads) (final manuscript), Kanebo Kida Experimental Theater
- *Kubi* (Head) (final manuscript), television lyrics, Short Short Stories, 58th episode
- *Shukudai* (Homework) (first manuscript), Theater of Love
- *Kusunoki Masashige*, episode 6, *Dotō Nihon-shi* (Tempestuous Japanese History), Program to Commemorate the 15th Anniversary of MBS

○ Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Institute provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members listed below were accurate at the time this newsletter was edited, but may have changed subsequently.

Selected research

1

Basic research survey of materials relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi

Principal Researcher: Kuniko Hamaguchi (Affiliated Lecturer, The College of Intercultural Communication, Rikkyo University)

Collaborative Researchers: Akira Kikuchi (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Kaoru Matsuyama (Full-time Staff, Waseda University Library), Tomoaki Kojima (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Kaho Mizuta (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Kazuko Yanagisawa (Part-time Lecturer, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University)

Research objective

Many materials related to Tsubouchi Shoyo and Tsubouchi Shiko stored in the Theatre Museum have not yet been organized. Individual items belonging to the extremely large collection of materials on Shoyo (including manuscripts written in his hand and letters he received) have not been investigated. Moreover, many of these items have not been assigned registration numbers. Artifacts relating to Shiko have been donated in the last dozen years. These remain in their original condition, as it has not been possible to confirm their content, impeding the task of arranging them. The plan for this research project involves first ascertaining the extent of the collection and then investigating individual artifacts (in order of priority and with respect to the availability of time). A detailed inventory will be prepared, contributing to future research.

Summary of the research findings

○ Shoyo Tsubouchi-related materials (letters sent to Shoyo Tsubouchi)

This year, we made progress in arranging and provisionally cataloguing the previously unarranged letters. We have provisionally catalogued the letters from around 400 individuals addressed to Tsubouchi Shoyo, not including letters from non-Japanese persons. We produced digital copies of 765 letters from 232 individuals writing these letters. With regard to reprints, we have completed the chronicling and reprinting of 128 of Aizu Yaichi's letters to Shoyo. The correspondence between Shoyo and Yaichi has already been published in "Correspondence between Tsubouchi Shoyo and Aizu Yaichi [*Tsubouchi Shōyō / Aizu Yaichi ōfuku shokan*]" (1968), but the abovementioned reprints are all newly publicized letters. Many of Yaichi's letters are lengthy, and they contain his thoughts and honest feelings openly expressed to Shoyo. As such, they represent a precious source that augments hitherto unclear areas.

Also included in the body of materials are Shoyo and Yaichi's *waka* and *haiku* poems, as well as postcards with beautiful illustrations. This year, the 80 missives, representing the first half of the collection, will be published in the 39th issue of "Theater Studies [*Engeki Kenkyū*]" (Kikuchi, Matsuyama, Yanagisawa, Hamaguchi, "Reprint of the Letters sent to Shoyo Tsubouchi 1: Reprint of the Letters from Yaichi Aizu to Shoyo Tsubouchi (1)"). The second half is scheduled for publication next year.

○ Shiko Tsubouchi-related materials

Of the 20 boxes containing materials related to Tsubouchi Shiko, we have opened five and arranged three. These boxes contain approximately 1,000 photographs and approximately 1,800 letters, and we have so far made provisional catalogues of the contents and digitized the photographs.

The collection sheds light on the new school of Japanese drama (*shingeki*) during the Taisho and early Showa periods, including the drama studies association [*Gikyoku kenkyūkai*], arts association [*Geijutsu kyōkai*], and Takarazuka Popular Theater [*Takarazuka Kokuminza*], which was placed under the charge of Shiko by its founder Kobayashi Ichizo. This area of theatre research has seldom received attention hitherto, owing to the limited number of historical sources. The collection also provides a survey of the people who backed up Shiko, many of whom were the Waseda graduates who resided in the Kansai area. In addition, the set also clarifies that groups such as the Takarazuka New Theater Company [*Takarazuka Shingeki-dan*] (an attempt for training young men Ichizo planned in 1919) were, from Shiko's perspective, ephemeral "Takarazuka Arts Societies [*Takarazuka Bungei-kyōkai*]." We presented our research findings on December 13, the second day of the 2015 Kabuki Research Association Autumn Conference held at Gakushikaikan (Mizuta "Tsubouchi Shiko and the Takarazuka Non-regular Students").

Research on materials related to the presentation of silent films, and particularly their musical accompaniment

Principal Researcher: Seiji Choki (Professor, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo)
 Collaborative Researchers: Fumito Shirai (Part-time Lecturer, College of Liberal Arts and Sciences, Tokyo Medical and Dental University), Makiko Kamiya (Visiting Researcher, National Film Center, The National Museum of Modern Art, Tokyo), Kotaro Shibata (Doctoral Program, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo), Yohei Yamagami (Part-time Lecturer, Faculty of Music, Tokyo University of the Arts)

Research objective

The topic of this research is the Theatre Museum's collection of musical scores used to accompany silent films produced from the mid-1920s to the early 1930s. According to the 2014 survey of the materials, the bulk consists of scores held by movie theaters, particularly *Goraku-kan* in Shinagawa under the direct management of the Nikkatsu Corporation, and materials held or used by Koichi Hirano (1898–unknown), a musician who worked in movie theaters directly run by Nikkatsu in the 1920s, such as the *Goraku-kan*. This study aimed to survey, primarily, the “Hirano Collection” and to clarify the cinematic practices in the Taisho and early Showa periods by analyzing the musical scores in particular.

Summary of the research findings

① Background Research/Content Analysis of Score Materials

The scores were collected and used at least between 1924 and the beginning of the talkie era in 1933. We catalogued and collated score parts of music anthologies, such as the domestically published anthology *Small Orchestra*. These parts were supposed to be used infrequently, and as such, had remained unarranged (around 400 specimens). The analysis revealed that musical instruments were selected according to the size of the theater ensemble; handwritten parts (particularly for the *shamisen*) were added; and the score parts had a systematic collection and management.

② Survey of Contemporaneous Documents and Relationship with other Score Materials

We collected and surveyed contemporaneous magazines and newspapers, such as *Tokyo Engei Tshushin* (Tokyo Performing Arts News), to examine the activities of contemporaneous musicians and the functions of musical performance as accompaniment to cinematic screening. We also compared the

collection's scores with those from the posthumous collections of Koka Sassa (Yorii-machi, Saitama Prefecture) and Nobuhiro Matsudaira (Toyota-shi/Matsudaira-go, Aichi Prefecture). This comparison provided a glimpse of a process whereby musical accompaniments to Japanese films permeated into Nikkatsu-run cinemas at the behest of Nikkatsu Corporation.

③ Examination of Score Materials for Each Work and Screenings Accompanied by Reconstructed Music

Scores preserved in the collection that were prepared for a specific work can be divided broadly into two categories:

- Compiled Score Handwritten by Hirano [Figure 1] (31 works and fragments of others)
- Compiled Score Distributed by Nikkatsu, in simple print form [Figure 2] (12 works and fragments of others)

For reference purposes, we screened two of these works: *Lieutenant Colonel Tachibana, the War God* [*Gunshin Tachibana-chūsa*] using a compiled score distributed by Nikkatsu (eight themes, including music taken from imported anthologies and military songs), and *Chushingura* using a compiled score handwritten by Hirano (nine themes, including classic traditional Japanese music and a piece composed by Nobuhiro Matsudaira). We analyzed the sources of the music, and, in collaboration with the performers, determined the setting of musical instruments, number of repetitions of each number, and the scenes they accompany. The screenings were important attempts in reconstructing historical practices. The experiment highlighted a number of issues such as how the score should be used, its relation to the narrator's explanations, and discrepancies with the utilization of Western accompanying scores. It will be necessary to examine how to utilize the scores.

Towards an archeology of projection media — The arrangement and publication of “magic lantern” slides and the organization of exhibitions and art works based on digital data

Principal Researcher: Ryo Okubo (Project Research Associate, Public Collaboration Center, Tokyo University of the Arts)

Collaborative Researchers: Machiko Kusahara (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University), Eiko Kogo (Associate Professor, Meisei University School of Humanities), Manabu Ueda (Research fellow of Japan Society for the Promotion of Science), Miyuki Endo (Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography)

Research objective

The Theatre Museum has many image-related cultural materials from the prehistory of cinema that are extremely precious, even when viewed from the perspective of global media history. This joint research project involves systematically arranging the Theatre Museum’s collection of slides on “magic lantern” and “*Utsusie*” (Japanese-style magic lanterns popular from the late Edo to the Meiji periods), and then specifying the age and themes of these slides, which have not been catalogued. This project further aims to share and present its findings to the public through an exhibition, a catalogue, and a database. In exploring the value of these slides, the research examines the option of using them as the basis for works of art and digital data.

Summary of the research findings

The exhibition “Magic Lantern Exhibition: The Archeology of Projection Media [*gentō ten: purojekushon media no kōkogaku*]” held from April to August 2015, and the publication of “The Natural History of Magic Lantern Slides: The Archeology of Projection Media [*gentō suraido no hakubutsushi: purojekushon media no kōkogaku*]” (Seikyusha, 2015) have highlighted two outstanding issues: (1) The necessity of collating slides with a magic lantern sales catalogue; and (2) elucidating the relationship between magic lanterns and other contemporaneous forms of visual culture.

With regard to (1), we have worked on digitizing the sales catalogue held by the Tsubouchi Memorial Theatre

Museum and the sales catalogue held by Machiko Kusahara, which relates to the museum’s slides. The museum also holds foreign slides. We collated these slides with LUCERNA, a leading Magic Lantern web resource. The comparison revealed that the museum’s slides listed under categories such as “artists and musicians” and “photographers and children” were produced in 1905 by Theobald & Co. of Britain. We will continue to collate the materials with sales catalogues or databases, and we will add new findings from such comparisons to the Tsubouchi Memorial Theatre Museum database.

With regard to (2), in November 20, 2015, Miyuki Endo produced the report “Matsuchi Nakajima’s Magic Lantern Production [*nakajima matsuchi no gentō seisaku*].” Endo shed light on magic lantern production by Matsuchi, who was also a photographer, and revealed that artist Sono Akio drew the rough sketches of the slides. Endo also discussed the relationship between magic lanterns and other forms of visual culture, including photography, lithography, and oil painting. On January 12, Erkki Huhtamo produced the report “Screen Practice - Media Archaeological Perspectives.” According to Huhtamo, magic lanterns involved not only visual imagery but also music and performance. Based on this perspective, Huhtamo argued that the magic lantern was related to forms of mass culture, including illustrated narrations to moving panoramas and illustrated presentations of broadside ballads or *bänkelsang*.

Selected research

4

The investigation and research into the Senda materials — Koreya Senda and contemporary plays

Principal Researcher: Yukako Abe (Professor, Faculty of Arts and Letters, Kyoritsu Women's University)
Collaborative Researchers: Keiko Miyamoto (Part-time Lecturer, School of Humanities and Social Sciences, Shirayuri College), Terada Shima (Part-time Lecturer, Faculty of Humanities, Seigakuin University), Hirokazu Akiba (Professor, School of Creative Science and Engineering, Waseda University)

Research objective

Articles that belonged to Koreya Senda were donated by his daughter Momoko Nakagawa in April 2001. In total, there were more than 300 cardboard boxes (at the time they were received) containing old books and play-related materials. We have advanced the work of broadly cataloguing and arranging these materials. Certain materials, particularly books, albums, scrapbooks, and cards, have been available for viewing since 2005. However, at present, these materials have merely been provisionally arranged, and their content has not been studied. The research has focused on "J: Michio Ito-related materials" in the Senda Collection. We have advanced the arrangement, storage, and digitization of these materials, as well as in identifying the issues and research methods necessary for using a diverse range of theater materials as basic research material. While carrying out the documentation of "J: Michio Ito-related materials," we arranged and discussed the information related to the Ernie Pyle Theatre from 1945 to around 1950.

Summary of the research findings

(1) Confirming the Content of Materials and Making Digital Images

We confirmed the content of J1 to J31 of the Michio Ito-related materials as follows:

- J1, J2, J3, J4, J5 (H31): Photo albums
- J11-8: Scrapbooks from 1954 to 1950
- J23: Material related to the Ernie Pyle Theatre
- J24: Material related to the Olympics
- J27: Wartime material, Material related to the NANYO PULP Co.,Ltd.
- J28: Letters

The categories for the materials include photographs, programs/brochures, scripts, journal/newspaper articles/excerpts, handwritten memos, draft manuscripts, and letters. Of these, we worked on producing digital photographs of 27

photo albums (around 960 photographs), and also letters and material related to the Ernie Pyle Theatre. We checked the details, such as captions on photographs and authentication notes, and then noted such details on the material data.

The photographic materials constitute a precious resource for tracing in detail the life of Michio, who was active in Europe, America, and Japan in the 1920s to the 1950s. In the future, it will be necessary to research the documentation of the materials, such as who took the photographs and where they were developed. The letters (J28) include those (around 53 specimens) written by Michio to his wife Tsuyako during his confinement in Camp Livingstone between 1941 and 1943, as well as letters related to Michio's involvement in the plan to build a Japanese town in post-war Los Angeles. The collection related to the Ernie Pyle Theatre (J23) includes internal theater material from 1946 to 1954, and material related to Michio's stage creation. In each case, digital photography has prevented loss due to degradation of the original material and enabled a diverse array of materials to be examined organically.

(2) Significance of Materials Related to the Ernie Pyle Theatre

Michio returned to Japan in December 1943. After the war, he was appointed as artistic advisor, director, and choreographer in the Ernie Pyle Theatre, owing to his fluency in English, knowledge of American culture, and understanding and leadership with respect to the Japanese staff and professionals in the arts. As can also be inferred from the collection, he was a useful human resource for both the Japanese and Americans. Further, the memos, sketches, and scripts made during the actual stage creation shed light on the constructions and contrivances used in revues and shows, whereas the stage photographs and programs provide a glimpse of the performances staged. These stage works were the result of the fact that such a personality as Michio was present in such a special time and space.